

あさのあつこさん

[作家]

小説『バッテリー』が発表された時、こんな児童文学があったのかと衝撃があった。あさのあつこは10代の気持ちに思いを残し書くことで昇華させている。



書くことで10代を生きなおす

——『バッテリー』をはじめ、あさのさんの小説では10代の子どもたちが主人公になるのはなぜでしょうか。

今は一般書も書きますが、やはり10代を書くのが一番おもしろいし、好きですね。10代特有の危うさ、その時にしかない愚かさも含めて、切ない。それが好きなんです。自分が10代の頃に置いてきたものが、ずいぶんあるんですよ。書くことによってもう一度10代を生きなおしてみたいという気持ちがあるんです。『バッテリー』なんて、その最たるもの。あの時、自分はこんな風に生きたかったとか、あんな言葉が欲しかったという思いを残しているんですね。「お前の球は必ず受けてやる」とか「投げろ」って、自分自身が誰かに言いたかったとかね。

それになぜか鮮明に覚えている感情があるんですよ。悔しさや切なさ、「お前は子供なんだから」と言われて、「あたしはだめなんだ」って思った気持ちとかね。そういうものが今も疼いている部分があって、「ああ、ここを書かないと、前に進めない」と思うんです。「ここを書いてしまえたら次に進めるかもしれない」って思うんですね。だから大人よりも10代が書きたいんでしょうね。

自分とストレートに向き合う

——小学校で教えていた経験も持ちですね。

講師だったけれど、ぜんぜんだめな先生でした。向いていなかったですね。大学が教育学部だったし、小学校の先生ならば夏休みや冬休みがあるので、そこで小説が書けるなど思ったんですけど。甘かったですね、やっぱり(笑)。

今、中学校などで単発で授業をする機会があるんですよ。内容は教科書にとらわれない。香川県の中学校で、古今東西のいろんなラブレターを紹介した後、自分の一番大切な人へ、異性じゃなくても、人間じゃなくてもいいから、書いてみる。皆、一生懸命書いてくれましたね。先週死んでしまった犬へ、とかね。聞いている私も泣けてきました。

子どもって、すごく大人の部分もあるし、子どものところもある。人間は皆そうですが、こちらが思っているのと全く違うところがたくさんあると思います。特に10代はそう。私が10代の頃一番嫌だったのが、お前のことはよく分かっていると言われること。自分のことを分かっているのに、分かっていると言われるのは嫌。その思いはまだありますね。

でも10代って一番いろんなことを考える。哲学というとおかしいかもしれないけれど、「人間ってなんだろう」「私ってなんだろう」とか死ぬこと生きることを考えますよね。自分とストレートに向き合っている。私はまだまだ、その気持ちが忘れられない。10代の負の気持ちがね。それを書くことで昇華させ、また思い出しているんです。

大人がゆとりを持って子どもに接する

——今の子どもたちは悩みも多いけれど、大人はどういう対処をすればいいと思いますか？

学校の先生も忙しいですものね。今のお母さんやお父さんも忙しい。忙しい大人たちが、子どものためにアンテナを張れるだろうかと思うんですよ。もうちょっと大人にゆとりがないと、子どもを思うことができないでしょう。

大人は子どもたちに、「自分はお前たちの歳ぐらいに、こんなことを言ってほしかった」とか、自分の当時の感情、悔しかったこと、悲しかったこととかをね、話すことが大事だと思うんです。大人ぶることはないんですよ。

——今後の作品は？

児童文学ど真ん中。小学校3、4年生ぐらいの子が読むようなものを書きたいです。それと『バッテリー』は多分、私の中で終わっていない。終われなかった。だから先があるかもしれません。



あさのあつこ | プロフィール

1954年、岡山県生まれ。青山学院大学文学部卒業。91年に作家デビュー。野球に打ち込む少年たちの葛藤や繊細な思いを描いた『バッテリー』で野間児童文芸賞、日本児童文学者協会賞を受賞。この作品はコミック化、映画化など一大ブームとなった。地元岡山の景色を織り込み、10代の少年少女の気持ちを綺麗事ではなく、文章にした作品は児童文学を超えると定評がある。

10代に残した思いがある。
これを書かないと前に進めない。
そう思うから書くんです。